

令和7年度第3回富山県総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和7年8月19日(火) 13:15～14:05
- 2 場 所 県民会館 302 会議室
- 3 出席者 富山県知事 新田 八朗
富山県教育委員会
教育長 廣島 伸一
委 員 坪池 宏
委 員 大西 ゆかり
委 員 黒田 卓
委 員 牧田 和樹
- 4 事務局出席者 経営管理部長 田中 雅敏
経営管理部次長 矢野 康彦
理事・教育次長 小杉 健
教育次長・教育みらい室長 中崎 健志
教育次長 板倉 由美子
学術振興課長 水上 優
教育企画課長 森安 祐成
県立高校改革推進課長 丸田 祐一
他関係課職員数名

5 議 事

「新時代とやまハイスクール構想」実施方針(素案)について

6 会議の要旨

司会が開会を宣し、新田知事の挨拶後、富山県総合教育会議運営要領第3条並びに知事の指名に基づき、以後の議事については田中経営管理部長が進行した。

「新時代とやまハイスクール構想」実施方針(素案)について

(田中経営管理部長)

- ・事務局から、「新時代とやまハイスクール構想」実施方針(素案)について説明する。

丸田県立高校改革推進課長が、資料1「新時代とやまハイスクール構想」実施方針(素案)、資料2「新時代とやまハイスクール構想」の学校像に沿って説明した。

(田中経営管理部長)

- ・委員の皆様からご意見いただきたい。

○委員からの意見

(坪池委員)

実施方針のポイントとしては、教育内容について、改めて議論して、新時代の7つの類型を示すことができたと思っている。将来子どもたちが社会でどのようなことが求められるのか、あるいは子どもたちの実態、ニーズ、高校の出口と入口、これらを踏まえて作られており、上手くまとまったのではないかな。

おそらく生徒は色々と自分の高校生活をイメージしながら、高校を選択することになっていく。例えば、難関大学へ行きたいと思っている子どもがいるとして、ある子どもは、大学でやっていることを先取りして勉強したいと考える、一方では、高校での学習内容をしっかりと学習して、良い大学に入りたいという志向も当然あると思う。

それから、特定の教科に不安がある子どもにとっても、例えば、高校へ入ってから、その不得意科目を得意科目にしたい子もいれば、得意な科目をさらに伸ばしていきたいと考える子もいると思う。それだけではなく、色々な子どもたちがこの7つの類型の中で色々と考え、自分たちが将来どのような高校生活を送るのかということ踏まえて、主体的に判断する、そういうことが求められていくように思う。協議の中では、輪切りについての発言もあったが、このような7つの類型によって子どもたちが主体的に、高校を選択する自由のある教育課程になっているのではないかな。

(大西委員)

第1章の10、11 ページの部分については検討委員会の中でも、本当に様々な意見があって、その意見を、取り込みながらまとめて、7つの類型にさせていただけたかなと思う。

資料2について、7つの形ということで、虹色に、7つの色に分けて、本当に未来が明るい素晴らしい学校を作り上げていこうという気持ちも出ており、わかりやすく良いと思っている。

資料2を見ると、今ある県立学校全てが、新しいタイプ、類型の学校になることが、一目瞭然に皆様にわかりやすく示されていて、私自身もとてもワクワクするような感情を抱いた。

ぜひ、この新しい学校に進学していく子どもたちも、同じような感覚や共感を持ち、魅力についてよく伝えればいいと思う。中でもプログレスハイスクールと実践ハイスクールについては、今ある普通科の高校や工業科の高校とどう違うのか、新時代ハイスクールのこう変わるという新しい魅力もうまく伝えれば良いと思う。

(黒田委員)

色々な議論があったかなと思うがそれらを非常にうまく取り入れていただけたと思

う。特に大規模校のところに關しては、私もだいた、意見を言わせていただいたところだと思うが、最終的には、県で1つ、それなりの大きさの規模の学校をつくるということで、やはりそのスケールメリットを生かした教育活動に、この規模だったら期待ができるのではないかと思っている。

どこに設置するかは次の課題となってくるが、県内のどこからでも通えるという富山県の小さいがゆえのメリットを活かして、うまく、この学校を育てていけるといいのではないかと思った。同時に大規模校だけではなく、中規模校や小規模校についても今後考えていかないとはいけない。

今、新しい学校を作るという話になっているが、県内の各学校が、これまで培ってきた伝統や文化をいかに継承していくか、良いものは継承していくべきだし、それをまたさらに発展させていくことを考えていくと、どのようにやっていくのが非常に難しい問題だと思っている。

職業系の学校に關しても、これまで以上に地域産業との連携を強化していくこと、より実践的な学びにつなげていけるように作り上げていくことが非常に重要なのかと。

今回はある程度の枠組みを、この素案でお示しするということところだが、今後それぞれの学校も、もっと主体的に関わっていただき、どのように学校の良さを残していけるのか、新しい学校ではそれをどう発展できるのかといったところを考えていただく。そういったところに、ぜひ参画していただけるような、議論を行っていく必要がある。

(牧田委員)

今までの高校再編というのは、基本的には既存の学校をベースに、くっつけたり減らしたり、数を動かしたりしていた。そこだけの変更で乗り切ってきた。別に批判ではないが、富山県の教育が、ちょっと時間が止まっていたところがあると感じている。

今、新時代ハイスクールの類型が7つ、ここに示されているが、6のデュアルシステム以外は、すべて全国どこかにモデルがある。それが今ようやく日の目を見てきたというのは、裏を返せば、もう少し早く、6以外のことについては取り組めた可能性もあったと思っている。

それが今、大きく再編するときに出てきたことは、若干遅きに失したかなというところもあるが、そういう現実に直面しているということ。

その大元の原因は何かを考えると、スクールポリシーがきちんと作られていなかったことだと思っている。教育委員会の方で、大まかな俯瞰したスクールポリシーのベースとなるようなことは出していたが、各学校で、それぞれの特色を活かしたり、それぞれの特色を前面に出したりするようなスクールポリシーが作られていない。

今回この再編のベースにあるのは、そのことが大変重要であるということ示していると思っている。そのため、新時代ハイスクールの類型として7つ挙げているが、それぞれの学校が、これをベースにスクールポリシーを作っていくことが、多分こ

れまでにはなかったことだし、そういう意味ではこの方針というのはかなり画期的な、示唆を与えるものだろうと思っている。

ただし、今我々が議論している前提条件で、確実なのは15年後、高校に入る子どもの数がこれだけになるということで、それ以外は不確実である。そのため、確実な子どもの数に従って、変更の枠組みはこのまま変わらずにいくのだろうと思うが、今、新時代ハイスクールの類型として7つに分けたことは、時代のニーズによって大きく変わる可能性があり、今この実施方針もオーソライズされるわけだが、これが金科玉条になってはいけない。

(広島教育長)

案を作る事務局として、3月に基本方針を取りまとめて以来、事務局内で色々な検討を進めつつ、5月からは4回の検討会議でのご意見もいただいた。また、6月議会でものご意見もあり、その間には委員の皆様と埼玉の方に視察に行かせていただいた。そういった経緯でまとめたのが今回の素案。

先ほどの事務局の説明と重なる部分があるかと思うが、3月の基本方針についてはさらに深掘りをさせていただいている。これを踏まえて第1章の1、新時代とやまハイスクールの設置方針として、新時代ハイスクールについて7つの類型を明示して、目指すべき学校像と、提供する主な教育内容を示させていただいた。

第1章の2から4には各期の方向性、設置時期・設置エリア、また各期における配置の姿を示させていただいたところで、これらが実施方針のポイントであると認識をしている。先ほど牧田委員からもあったが、これまでの再編の検討にあたっては数合わせではなくて、提供する教育がどうあるべきかをしっかり議論して、理解を得て考えていくべきだという意見を多くいただいていた。

1つの例だが、昨年自民党PTからの提言もあったところ。こうしたことを踏まえて、昨年来の基本方針、今回の実施方針になるが、昨年度当方で実施した高校2年生と教員に対するアンケートで、将来の高校生のためにどのような県立高校が必要だと思うかという設問に対して、高校生、教員、双方とも一番多かった答えが、学習内容を選択できる仕組みがある学校ということだった。

高校のあり方については、各人が様々なご意見を持っており、それを踏まえながら、条件をどのように整えればいいのかということを考えてきたわけだが、なるべく多様な選択肢を提供していくことが、1つの大きなポイントなのかなとこの素案を取りまとめてきた。

素案については先ほど事務局の説明にあった通り、今後ご意見も伺っていきたいが、これをベースに、具体の高校づくりを進めるにあたっては、さらに物事を詰めていく必要がある。委員の皆様にはそうした観点からも引き続き、忌憚のないご意見を賜ればありがたい。

(田中経営管理部長)

今回の協議内容を踏まえ、知事からご発言をいただきたい。

(新田知事)

総合教育会議委員の皆様には、新時代とやまハイスクール構想検討会議の方にもご参加をいただいている。これは議論を深める、スピード感を高める観点からそのような形をとらせていただいた。

そのようにして今回実施方針素案をまとめ、そして本日議論していただいた。この中では、さらに基本方針を深掘りし、教育内容をさらに具体化するというところを行った。新時代とやまハイスクールを総合選択ハイスクールなど7つの類型とし、20校を目安として、いつ、どのエリアに設置しているかを描いた。

そして令和10年度頃までと想定しているが、第1期校については、速やかに対応すべき教育課題の解決を図っていくために、グローバルハイスクール、あるいは未来探求ハイスクール、これを設置する方向性を示したところ。本日こうした形で実施方針の素案を取りまとめることができ、これまでの皆様のご協力、またご奮闘に感謝を申し上げる。

今後、パブリックコメントに付し、県東部と県西部で2回の意見交換会を予定している。ここでさらに幅広いご意見をお聞きし、9月議会での議論も踏まえて、再度総合教育会議で検討いただき、実施方針を取りまとめたいと考えている。

(田中経営管理部長)

ただ今の知事の発言にもあったが、新時代とやまハイスクール構想実施方針の素案として、今回お示しした案をもって決定するというところでよろしいか。

今後のパブリックコメントや意見交換会で様々なご意見をいただく予定としている。9月議会での議論を踏まえ、今後の総合教育会議におきまして、実施方針を取りまとめたい。

(牧田委員)

中身についてはそれで良いが、懸念されることが1つ2つある。

今、ようやく大まかな方針、枠組みが決まり進めていくが、今後、仕組みをどうするか、先生方を含めたリソースをどう整備するのかというフェーズに入っていくと思う。

個人的な意見だが、この計画では5年刻みで進めていくとなっているが、本当に目安としてとらえるだけのものであって、前倒しができるのならすべきだろうと思っている。

このように申し上げるのは、最近、偏差値教育の弊害と言われているが、そもそも偏差値教育というのは誰も作っていない。入学者のニーズが高まれば競争倍率が増えて、当然そこに競争が起きるから、その競争の指標といった形で偏差値がクローズアップされるだけの話。偏差値が最初から幾つだと決めている高校なんて1つもない。偏差値というのは学校が決めたのではなく、子どもたちが行きたい学校と、来て欲しい学校との間で発生する取引のようなものの結果が偏差値だと思っているが、これが偏差値教育の弊害だと言われている。

それに振り回されずにやるべきだろうし、このプロセスの中で、新時代とやまハ

イスクールが2校できたり4校できたりとなっていくと、ここで必ずまた、偏差値教育だと言われる可能性も出てくる。だから私は、偏差値偏重などという理屈が出てこないようにすべきだろうというのは強く思っている。

(田中経営管理部長)

以上で本日の議事を終了する。

この後、事務局より、閉会の挨拶を行った。

以上